

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	井伏鱒二の作品における皮肉
Author(s)	ムシル ルカス,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 24・25期 : 40 - 48
Issue Date	2010-12-24
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038806">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038806</a>
Right	
Relation	



# 井伏鱒二の作品における皮肉

ムシル・ルカス

## 1. 始めに

この研究では、『多甚古村』、『侘び助』、『遥拝隊長』という作品を分析し、皮肉や皮肉めいた表現を見つけ、その使われ方を解釈する。その意味と共に、時代状況など社会的な背景を考える必要がある。そのように作品の皮肉を含む部分を検討することによって、読者に井伏が送るメッセージがどのようなものか明らかにしたい。

井伏鱒二は広島県の福山市加茂町出身で、西日本について知っていることを自分の作品によく生かした作家である。井伏（1898年-1993年）は長生きし、ほぼ100年生きたのだが、その間何百もの小説、随筆を書いた。私はそのうちのいくらかを読み、このテーマに関わるかどうかを考え、これら三つを選んだ。

チャトマンの研究によれば<sup>1</sup>、「皮肉」とは作者が自分の思想、信条を作品に込める方法の一つだ。皮肉は語り手の一種のコメントであり、そのほとんどが登場人物に向けられている。登場人物に対する的を射た皮肉は人物の描写やストーリーに表れることが多い。そして、皮肉は語り手と読者の間の内緒話のようになり、語り手が対象に使った言葉とは反対の意味になる。つまり、皮肉を使って遠まわしに何か、あるいは誰かを非難する井伏は間接的に読者に何か個人的な見解を伝えているのである。一方、作者の述べていることが理解されるかどうかは、読者の知力、人生経験による。

## 2. 『多甚古村』

甲田巡査の駐在日記の形で、南国の海辺の村、多甚古村に起った喧嘩、スキャンダル、泥棒などの騒動や、庶民の実生活が軽妙に描かれている。この作品は1939年に発表され、ストーリーも戦時中だ。時代状況を考えてみよう。その時代、日本では表現の自由が制限され、作家は自由に書けなくなってしまった。自分の身を危険にさらさないように、随筆も、小説も、言葉に注意を払わざるを得なかった。直接戦争や権力を持っている政治家などを非難するのは命にかかわるほど危険なことだった。その時代、主張したいことを削らずにどのように作家たちは検閲から逃れただろうか。現代のストーリーを昔の世界に移す、つまり歴史小説にすることが考えられる。また、その時代のストーリーを使っても、検閲官に分からないように、皮肉を使い、その痛烈な意味を分かりにくくするという二つのテクニックがある。『多甚古村』という小説は後者である。

---

<sup>1</sup> Chatman, Seymour, *Story and discourse: narrative structure in fiction and film*, Ithaca, N.Y., Cornell University Press, 1980, p. 240-242.

多甚古村には眼光寺という寺がある。その眼光寺は眼光という偉い僧侶によって建てられたものである。甲田巡査の一月十九日の日記では平太先生の長男が出兵するため、村人が平太の家の前に集まるところが描写されている。村の者が出兵することになると、それはいつも村にとって大きな光栄であるため、巡査をはじめ、先生たち、お坊さん、村長までがお祝いに来る。眼界師というそのお寺の住職は軍隊に入る平太に古代中国の詩を読んでやる。甲田巡査がその詩の意味が分からないので、眼界師にノートに書いてもらう。そうすることで詩の意味は強調されることになる。

絶域 陽関の道

胡煙（こえん）と塞塵（さいじん）

三春 時に雁あり

万里 行人まれなり

苜蓿（もくしゅく）天馬に随（したが）い

葡萄（ぶどう）漢臣を逐（お）う

まさに外国をして懼（おそ）れしむべく

あえて和親をもとめざれ

何だか新しい詩のように思われたので「誰が作ったのや、眼界さんの作ったのやろう」とたずねると、眼界師は目をまるくして「わあ、違う。昔、唐の王維（おうい）という人が作ったのや。王維、字（あざな）は摩詰（まきつ）、太原（たいげん）の人。いま日本軍が入城して、日本人の工場もあるような太原の人じゃ。この人は、詩を賦（ふ）して楽しみとなし、弧居三十年に及んだといわれ、人を送別する詩をたくさんつくつとろ。秘書晁監（ちょうかん）、阿倍仲磨（あべのなかまろ）が日本に還（かえ）るを送るという詩もつくつとる」と眼界師は説明し「そうじゃ、この絶域陽関の詩も、劉司直（りゅうしちやく）が安西に赴（おもむ）くを送った詩じゃ。西のかた陽関を出（い）ずれば故人なからん。あの陽関の道、絶域に赴く人を送る詩じゃ。いま長男君を送る儂の心そっくり、云うてあるようじゃ」と云った。<sup>2</sup>

作家の感じ方が登場人物と違うのは確かだ。詩そのものは中国人によって書かれたものだからである。千年前に書かれたものだが、意味は変わらず同じに見える。ところが、現在は日本軍の火によって煙が上がったり、日本の工場などからほこりが舞い上がったりする。したがって、この詩には、今中国は外国に和親を求めるべきでなく、特に日本から国を守る必要があるという意味に取れる。<sup>3</sup>

今、中国は八方に目を配るべきであり、決して敵を友人と見なしてはいけない。読者が

<sup>2</sup> 『井伏鱒二』(多甚古村)、日本文学 53、中央公論社、1966 年、p. 221-222

<sup>3</sup> Líman, Antonín, *Paměť století*, Academia, 2004, p. 161

このような解釈に達するように作者が願っていなければ、この詩ではなく、他の人のまったく違う詩に決めただろう。眼界師はこの皮肉が理解できない。眼界はその名の通り目が悪いのだ。「眼界」という言葉は「目に見える範囲」また「考えの及ぶ範囲」<sup>4</sup>という意味だ。「眼界」が狭いことから、眼界という人物が皮肉を理解できるわけがない。

さらに、阿倍仲麿について述べることで、作家井伏はかつての日本と中国の関係を暗示している。阿倍仲麿という人は奈良時代の詩人として知られているが、717年に中国へ留学生として派遣され、死ぬまで中国で活躍した。<sup>5</sup>それに言及する作家井伏は中国人が昔、日本人に漢字のみならず、建築、科学、医学など色々な分野の知識をくれたことを思い出させようとしているに違いない。つまり、かつての中国の親切を当時の日本の侵略主義と対比しているのだ。

多甚古村のお寺は眼光寺という。そのお寺を建立した眼光師というお坊さんはその名の通りに利口な人だった。眼光とは「物事を見通す力。見抜く力」<sup>6</sup>という意味である。そして眼界師は眼光師の見抜く力を持っていないため、詠んだ詩の意味やメッセージを見通せない。

### 3. 『遥拝隊長』

『遥拝隊長』という作品は昭和二十五年に発表された。戦線から実家に帰ってきた主人公の岡崎悠一が戦地で事故に遭い、コンクリートに頭をぶつけた。その事故以来びっこになり、狂気の発作に悩んでいる。どんな発作かというと、悠一はすれ違う人を捕まえて、東方へ遥拝させたり、軍隊式の命令で脅かしたりするのである。村の住民を兵士と見なしている悠一は馬鹿だと思われる。その作品の意味が理解できるように、まず主人公の言動を分析しよう。

怪我をする前、岡崎悠一は理想的な兵士だった。天皇に恭順の意を表すために、よく東方へ遥拝をしていた。そのため「遥拝隊長」と呼ばれるようになった。悠一はリスクを顧みずにどんな命令にも従う兵士で、そのような愛国心や滅私奉公振りは後輩たちの心にも影響を与えていた。そして悠一の怪我はその代償だった。

どのように脳を痛めたかかというと、戦地で岡崎隊長が兵士を叱ろうとした時のことだった。川を越える橋の上で故障したトラックの修理を待っている部隊の一人が次のように言う。

すると、友村という上等兵が「贅沢なものじゃのう、戦争ちゅうのは。まるで贅沢じゃ。そもそもが、戦争ちゅうものは費用のかかるものじゃ」と云った。<sup>7</sup>

---

<sup>4</sup> <http://www.weblio.jp/眼界> 2010年5月27日

<sup>5</sup> <http://ja.wikipedia.org/阿倍仲麿> 2010年5月30日

<sup>6</sup> <http://www.weblio.jp/content/眼光> 2010年6月6日

<sup>7</sup> 『井伏鱒二』(遥拝隊長)、日本文学53、中央公論社、1966年、p. 347.

友村という兵士が戦争を批判したが、岡崎隊長はそれが許せない。岡崎隊長が友村上等兵に平手打ちを食わしたちょうどその時、そのトラックの運転手が試しに動かしてみた。すると、そのはずみで二人とも川に落ちてしまった。運悪く、爆破されたコンクリートの古い橋の残った部分に頭をぶつけた。友村上等兵は死んでしまい、岡崎隊長は病院へ運ばれた。岡崎悠一は救われたとはいえ、精神的には死んでしまう。脳を痛め、悠一は故郷へ帰る。気が狂っているのです、発作が起きると、村人を兵士と錯覚し、騒動を起こす。

悠一は「伏せえ、敵前だぞ」と居丈高に云って、その青年の肩をつかんで辻堂の縁の下に押し込めようとした。「何をする、失敬な。」と青年は、よろめきながら悠一の手を突きつけた。「反抗するか、ばか野郎。ぐずぐずいうと、ぶった斬るぞ。」そう云った途端、悠一は頬を殴りつけられていた。<sup>8</sup>

その時、その村人は悠一をどう思ったか。

それでも当時は、誰も悠一の言動を滑稽（こっけい）だと云わなかった。朝早く軍服姿で歩くのも、びっこを治すために調練運動しているぐらいに思われていた。様子が怪しまれ出して来るようになったのは、敗戦が近づいてからであった。完全に気違いの発作症状を見せたのは、敗戦後数日たってからである。<sup>9</sup>

戦争が終わるまで、悠一の言動は不思議に思われなかったと解釈できる。つまり、村人は、悠一が村人に命令を浴びせるのも、村人を兵士として対応するのも、戦時中はその可笑しさに気がつかない。戦時中、指示や命令をするのは普通だったからだ。

事故に遭ってから作品の時間は二つのレベルに分かれる。第一の世間の時間は変わらず流れて行くが、第二の悠一の時間は流れが止まっているという重要なポイントがある。具体的に言うと、その時点から悠一は現実を離れ、現実と幻想を区別できなくなるのだ。それゆえ、戦争が終わり、平和な時代になっても、悠一はいつまでも戦争の時代を生きていると思っているのだ。

また、いかに悠一の言動が不思議に思えても、友村上等兵との事件と戦後の発作による事件を比べれば、悠一の行動に何の変化もないことが明らかになる。怪我をする前、兵隊に命令を浴びせたように、傷を受けてからも村人の指揮を取った。いずれの場合も、悠一は気が狂ったような行動をしていたことに違いはない。つまり、悠一の言動が変わったのではなく、変わったのはむしろ村人の方だと言える。脳が傷つき、悠一の精神の時が止まったことによって、周りの人々の考え方が変わったのだと言える。そこに作家井伏はウエ

---

<sup>8</sup> 『井伏鱒二』(遥拝隊長)、日本文学 53、中央公論社、1966年、p. 340-341。

<sup>9</sup> 『井伏鱒二』(遥拝隊長)、日本文学 53、中央公論社、1966年、p. 343。

ートを置いたように見える。村人が戦時中悠一に精神病に気がつかなかったということは大きな皮肉である。戦争とは頭のおかしくなった人と正常な人の戦いというわけではない。その狂気は、誰も彼もを襲う病気、もしくはその村を覆う、手に終えない霧のようなものだ。戦争が終わり、その霧が晴れると村人たちは自分たちが何をしてきたか分かる。

戦争に行った悠一は、恐ろしい異国で幼少の頃から覚えている歌を歌う。その歌にもまた作家井伏は皮肉を込めた。

往んでやろ往んでやろ  
空籠（あきかご）さげて往んでやろ  
ハッタビラへ来てみたが  
カケスが鳴いて坊主原  
草刈り草刈り来てみたが  
刈りとるこぐち籠目をもれた  
空籠さげて往んでやろ  
—これで十五本目じゃ<sup>10</sup>

笹山村という村の子供達が歌う歌だが、戦争に負けて帰還する日本人兵士の運命を象徴している。その歌は「空籠さげて往んでやろ」という節で絶望やがっかりした気持ちを表す。そして、「カケス」は他の鳥の鳴き声や物音を真似するのが得意だが、それがいくらか「欺瞞」とか「偽物」を暗示している<sup>11</sup>。同じように兵士たちもだれも信用できない国「中国」や坊主原の国「シベリア」から帰還するが、笹山村の子供たちと同様彼らも「空籠」を持って帰る。<sup>12</sup>

解釈はもう一つある。鶴田によると、その空籠は悠一の空っぽの頭を象徴している。草のこぼれた籠が空っぽになったように、コンクリートにぶつけ、血と脳が流れ出た悠一の頭も空っぽになった。<sup>13</sup>それゆえ、井伏が悠一に歌わせた童謡はきつい皮肉と解釈できる。皮肉の対象は戦争から帰ってきた兵士、あるいは兵士を戦場に送った国、もしくは悠一の運命である。

#### 4. 悠一の家環境

悠一の精神を病んだ原因は家庭環境にあるとも見える。語り手によると、悠一は子供のころ父親がなくなり、それから母親は海に面した町の駅前にある旅館の住込み女中になっ

---

<sup>10</sup> 『井伏鱒二』(遥拝隊長)、日本文学 53、中央公論社、1966年、p. 345.

<sup>11</sup> <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AB%E3%82%B1%E3%82%B9>

<sup>12</sup> Líman, Antonín, *Paměť století*, Academia, 2004, p.200

<sup>13</sup> 『井伏鱒二研究』長谷川泉、鶴田欣也、明治書院、1990年、p.202.

た。語り手ははっきり言わないが、悠一の教育はおろそかになったはずだ。お金を稼ぐため、母親が遠い町へ行ったことにより、悠一は母親と離れ、寂しく育てられた。それを考えれば、悠一が無心に童謡を歌っても不思議はないだろう。

お金をたんまり稼いでから帰ってきた母親は家を建て直した。

屋敷のぐりに杉垣（すぎがき）を仕立て、庭の入口にコンクリート造りの歴大な門柱を立てた。杉垣や四囲の風景に対して、ちっとも調和のない景物だが、門柱にまで相当の資力かけたお袋の意気込みには、近所の人たちも一もく置かないわけには行かなかった。自然、この一家に貫禄がついたのである。

14

母親の態度に見られる変化を考えてみよう。悠一に寂しい思いをさせたこの母親はかまってあげられなかったことを物質的に補おうとしているのではないだろうか。自分が毎日そばにいてあげられない代わりに家を新しくしている。そうでなければ、見栄を張っているのだろう。家を建て直したのは父親が亡くなってからのことだ。門柱が庭に調和しないと言う語り手は作家井伏の否定的な評価をはっきり表している。しかし、同時に一家には貫禄がついたと言い添える。村長と小学校長が来ると、門柱を褒めながら、悠一は幼年学校へ入学する資格がある、応募しないかと勧める。そう聞いて、母親は喜ぶ。

村長たちが帰ってから、お袋は橋本屋に出かけて行って一部始終を喋った。その後で「ほんとに、今から思うと、門柱をこさえて、よかったですなあ」と云った。しっかり者の女でも気が上ずっていたものだろう。<sup>15</sup>

最後の文は重要な意味がある。ここでは語り手が母親の言動を皮肉っぽく批判している。それゆえ、『遥拝隊長』の中で批判されたり、皮肉っぽく扱われるのは悠一だけではなく、悠一の母親もだと言える。見栄を張る母親は立派な門柱を立てたことで村の中で評価を得る。そして、その門柱を理由に校長と村長は悠一を幼年学校に入れるよう薦める。幼年学校とは軍により設立された教育機関である。つまり、悠一を戦争に送り出したのは母親によって建てられた門柱だと言っているに等しい。母親はそのコンクリートの門柱を建てたことによって村長たちの注目を集めた。井伏鱒二は子供を戦争に送り出した責任を母親の見栄に見るのだろう。

#### 4. 罪と罰

作品のモチーフは罪と罰である。しかし、登場人物の運命があまりにも錯綜するため結、

---

<sup>14</sup> 『井伏鱒二』(遥拝隊長)、日本文学 53、中央公論社、1966年、p. 343.

<sup>15</sup> 『井伏鱒二』(遥拝隊長)、日本文学 53、中央公論社、1966年、p. 343-344.

誰に罪があり、誰に罪がないのか読者にはなかなか分からない。

この地方の訛り言葉によると、村中にどさくさのあることを「村がめげる」と云う。「こうち」とは、部落または近所隣のことである。「めげる」とは物の毀れることで、平穏無事な日常に破綻を来たす、といったような意味である。

もっばらの原因は、元陸軍中將、岡崎悠一という者の異常な言動による。<sup>16</sup>

しかし、笹山部落がめげた原因は悠一の異常な言動だけではない。部落では住民がみんな異常な行動を取っていた。悠一の異常な言動が友村上等兵を死なせたことは確かだが、他にも罪のある登場人物がいる。悠一の母親をはじめ、校長や村長もだ。悠一の母親は見栄で家を建て直し、それで村人の注目を浴びる。そして、それは悠一が幼年学校へ入学する原因になる。また、村長と校長は息子に応募させるよう母親にお世辞を言う。母親を騙したのだ。そうすることで、作家井伏はすべての責任を悠一に負わせる一方、皆間接的に罪があると言うのだろう。このような笹山部落のイメージはこの時代の日本にぴったり当てはまるのではないだろうか。この時代、混乱状態に陥った日本とこの小説に描写された笹山部落は明らかに相似形だ。

作家井伏の皮肉は悠一と悠一の母親の運命にもっとも込められている。悠一も母親も加害者だが、同時に被害者でもある。

作品に出てくる作家井伏が皮肉を込めた部分をまとめてみよう。

1. 笹山部落の住民が悠一の狂気に気づくのは戦争が終わってから。
2. 悠一は友村上等兵を死なせたが、自らも脳を痛めて狂った。
3. 友村上等兵は経済の視点で戦争を非難したが、そうするや否やその戦争で死ぬ。
4. 息子が戦争に行った母親の苦悩。一方、母親の極度の見栄のせいで悠一は戦争に行っただと言えぬ。
5. コンクリートの役割。コンクリートの門柱は悠一が出兵する原因になり、コンクリートの橋の残った部分が悠一の精神の健康を奪った。

『遙拝隊長』は一見反戦文学のようであるが、戦争を背景にさまざまな人間関係も扱っており、作家井伏は読者に社会的な問題についても考えさせる。戦争に関わるテーマを社会的なテーマと組み合わせることで、井伏は戦争の悲惨さと戦争がもたらす悲劇を描くだけでなく、非人間的行為につながる社会の問題も見据え、その原因を人間の見栄、自惚れ、ナルシシズムなどに見ている。

---

<sup>16</sup> 『井伏鱒二』(遙拝隊長)、日本文学 53、中央公論社、1966年、p. 339。



## 5. 『佗助』（波高島のこと）

1946年に発表された『佗助』という作品には作家井伏の皮肉の別の使い方がある。ここで皮肉られるのは戦争や人間の虚栄などではなく、江戸時代の官僚主義だ。井伏は江戸時代を扱っているが、昭和まで続く普通の人と偉い人、また偉い人の遺族や官僚主義者との間にある大きな距離に憤り、それを批判している。

ところで、「波高島（はだかじま）」という名前をみただけで分かると思うのだが、この名前を耳にして、まず頭に浮かぶのは「裸（はだか）の島」ではないだろうか。リーマンによると、「裸島」と「波高島」という同音異義語は日本自体に例えることができ、罪人を収容する「波高島」の官僚主義の裸の姿を暗示している。<sup>17</sup>「裸」という言葉は何も着ていない状態を表すが、この場合は目の前にははっきり見えるという意味だ。

佗助という男は波高島という島に他の罪人といっしょ流されている。これらの罪人は皆将軍によって定められた「生類憐れみの令」に触れたからである。「生類憐れみの令」により、動物や虫などの生き物を傷つけた者はすべて波高島に島流しになる。作家井伏は官僚主義が普通の人の生活をむちゃくちゃにすることをテーマに、「生類憐れみの令」によってもない状況を作った。この法律は人の生活をぶちこわす、何の役にも立たない法律の一つである。佗助は餌差（鷹の生き餌とする小鳥を捕る）という自分の仕事をしていただけで捕らえられた。佗助はお偉方の食欲を満足させるために法律を破って小鳥を捕らえようとして、役人に捕まったのだ。

ところが罪人たちの一人に、いったん三宅島から赦免になってまたこの波高島へ遠島になった、餌差の佗助といふものがいた。佗助は三宅島のときの「御縁」で小野八郎衛門と「顔なじみ」である。役人が下知しながら腕を振る恰好や、罪人を棒でなぐる恰好にも見覚えがある。鬚さをちょっとひねったお洒落のしかたにも見覚えがある。これは但し、みんなその恰好を、八郎衛門は以前の彼の上役であった三宅島の役人から真似たものである。しかもその本元である三宅島の役人は、その恰好を井戸家御側用人頭の氏家紋太夫といふ格式の高い人から真似たものさうである。また、その紋太夫様といふ人は、その恰好を将軍家の権臣で今をときめく、柳澤吉保様といふ人から真似たものさうである。<sup>18</sup>

この引用箇所から、作家井伏は間接的に島の役人の出世欲を皮肉っていると解釈できる。上役の真似をすることで出世できると信じている三宅島と波高島の役人はこのように井伏にからかわれる。ちゃんとした仕事ができない島の役人は佗助などのような職人と対比される。作品の他の箇所で、鳥を捕らえる佗助の巧みさが描写されるため、その技術はすぐ理解できる。人の殴り方を真似ること、島役人になること誰でもできるが、佗助のように

---

<sup>17</sup> Líman, Antonín, *Paměť století*, Academia, 2004, p. 188.

<sup>18</sup> 『井伏鱒二集』、(佗助) 現代文学全集、筑摩書房、1953年、p. 259.

四羽の鳥を一発で捕らえること、ちょっと見ただけでどんな鳥の巣であるかが分かる人はごくわずかだろう。しかし、新しい法律では小鳥を捕まえると、法律違反になる。つまり、そのたぐいまれな技術が侘助を島流しにしたのだ。鳥を捕まえる侘助自身が捕まるというのは井伏の大きな皮肉ではないだろうか。

## 6. 終わりに

井伏鱒二は紛れもなく日本近代文学の優れた作家だ。このレポートでは井伏鱒二の短編小説を三つ取り上げた。これらの作品は内容・文体・長さなどにおいてそれぞれ異なるが、その共通点は、やはり皮肉、皮肉っぽいところである。井伏鱒二はユーモアのセンスがある作家だが、それがまさに皮肉を込めたところに現れる。

これらの作品の中で作家井伏は人間の問題を取り上げ、それについて読者に考えさせる。そして、だいたいその問題を皮肉に包み、直接扱うことはない。『多甚古村』では、戦争中、自由に書くことができない時代なので、遠まわしに軍国主義や侵略主義を批判する。それは『遙拝隊長』でも同じなのだが、さらに人間の征服欲、自惚れ、尊大、見栄なども批判する。最後の『侘助』では、井伏はばかばかしい官僚的な決まりごととはごく普通の人をつらい生活に追い込むだけだと考えている。

このレポートではほんの三つしか作品を取り上げなかったため、井伏鱒二の創作全体をまとめるのは難しいのだが、作家井伏の文体や思想がかなりはっきりと見えてきた。井伏鱒二は戦争の悲惨さ、残酷さ、また滑稽さをよく描いているため、「反戦」が井伏の創作の特徴の一つと言える。さらに、近代社会の普遍的な問題を扱い、その解決に取り組んでいるのだが、そこにも井伏作家の人生観、世界観が見られる。

## 参考文献

Chatman, Seymour, *Story and discourse: narrative structure in fiction and film*, Ithaca, N.Y., Cornell University Press, 1980

『井伏鱒二』、日本文学 53、中央公論社、1966 年

Líman, Antonín, *Paměť století*, Academia, 2004

(リーマン、アントニン\_\_世紀の記憶、アカデミア、2004 年)

長谷川泉、鶴田欣也、『井伏鱒二研究』、明治書院、1990 年

小菅健一、『遙拝隊長』論、<http://ci.nii.ac.jp/>

『井伏鱒二集』、(侘助) 現代文学全集、筑摩書房、1953 年

<http://www.weblio.jp/>眼界 2010 年 5 月 27 日

<http://ja.wikipedia.org/>阿倍仲麿 2010 年 5 月 30 日

<http://www.weblio.jp/content/>眼光 2010 年 6 月 6 日

<http://ja.wikipedia.org/wiki/>カケス 7 月 6 日